

唐橋校舎で最後の工展

洛陽工業高（京都市南区）で3日、現在の唐橋校舎で最後となる「工展（工業展覧会）」が開かれる。校舎ができてから81年にわたり、市民の来場を受け入れて生徒が学習の成果を発表する場になってきたが、学校の再編統合により本年度末で校舎が使われなくなるためだ。生徒や教職員は間近に迫る学舎との別れを惜しみつつ、来場を呼び掛けている。

きょう 来場呼び掛け

洛陽工業高は1886年、学校と卒業生、地域に京都染工講習所として上京区で創立。工展は工業教育を広めようと1921年に始まり、35年に南区唐橋に移転した後

今年4月に同高と伏見工業高全日制が再編統合した京都工学院高が伏見

区に開校し、洛陽工業高の現2年生も来年度から京都工学院高の校舎に通うことになった。来年度以降、京都工学院高でも工展と同様の催しは行われる予定だが、唐橋校舎は最後となる。洛陽工業高卒業生の北田弘治教諭（58）は「いよいよかと寂しさを感じる」としみじみ語る。

3日の工展では、赤外線センサーを生かしてボールを運ぶ「サッカーロボット」を展示。1930年にベルギーであった万国博覧会に出展した「つづれ織屏風」などを収めた「創立百周年記念資料館」も特別公開する。

3年の中鶴心哉さん（18）は「この校舎では最後の大イベント。取り組んでいることをしっかりと伝えたい」と意気込む。同高OBの中村政彦教諭（55）は「工展は生徒が来場者から質問を受けることで力を付けられる場。生徒にいろいろなことを聞いてほしい。それが生徒の今後の学びにもつながる」と語る。開場は午前9時～午後3時。入場無料。（山田修裕）



洛陽工業高唐橋校舎で最後となる「工展」に向け、準備を進める生徒たち（京都市南区）



1966年の「工展」を写した写真（洛陽工業高提供）